

奈良・飛鳥京跡

あすかきょう

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村大字岡
- 2 調査期間 第一五二次調査 二〇〇四年(平16)二月～三月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 松井一晃・十文字健
- 5 遺跡の種類 宮殿跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥京跡の発掘調査は、一九五九年の第一次調査以来、継続的に
行なわれており、三時期の遺構が重複していることが明らかにされ



(吉野山)

ている。古いものからI
期・II期・III期と呼ばれ、
I期は舒明の飛鳥岡本宮、
II期は皇極の飛鳥板蓋宮、
III期は斉明・天智の後飛鳥
岡本宮、及び天武・持統の
飛鳥浄御原宮と推定されて
いる。中でも、III期遺構は
その様相が最も明瞭で、内

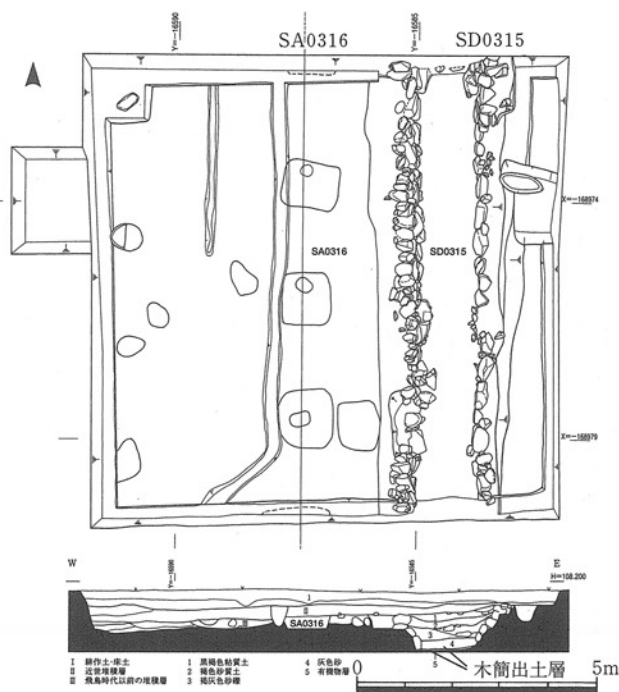
郭とその南東のエビノコ郭とそれらを取り囲む外郭から構成される
ことが確認されている。しかし、外郭は部分的な調査しか行なわれ
ておらず、その内容については不明な部分が多い。

第一五二次調査は、外郭に関する遺構、特にその北限の検出を目
的とした学術調査である。調査地は、飛鳥川東岸に広がる南東から
北西にゆるやかに下る平坦地にあり、III期遺構の内郭部分と飛鳥寺
との間に位置する。

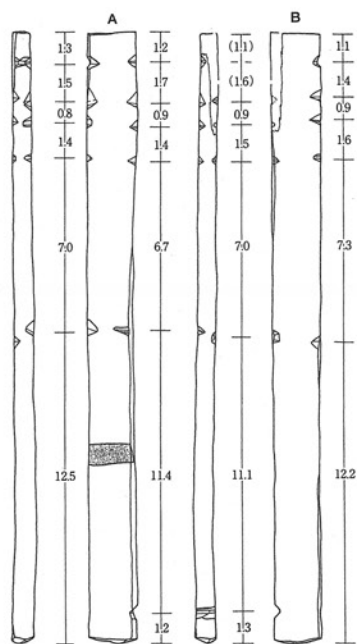
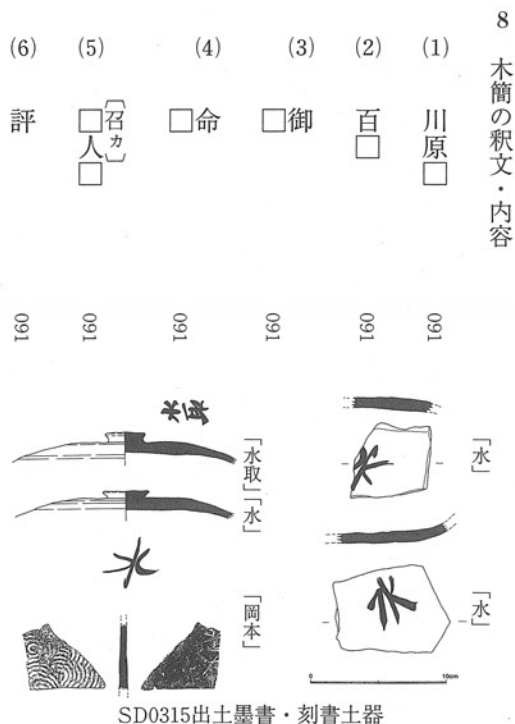
今回の調査では、飛鳥京跡の北限を示す遺構は検出されなかった
が、宮中枢の北部の状況が明らかになった。検出した主な遺構は、
石組溝SD〇三一五とそれに平行する掘立柱塀SA〇三一六、それ
らの直上を覆う礫敷SX〇三一四である。SD〇三一五は北流する
南北溝で、上面の幅約一・八m底幅約一・一m深さ約〇・六〇・
八mを測り、断面は逆台形を呈する。石組は、約〇・二〇・六m
の花崗岩を三段積み上げたもので、底には石を敷かない。溝の築造
時期は明らかでない。出土土器が最下層から最上層まで全て飛鳥
IV・V期のものに限定されることから、溝は宮廃絶後、程なく埋没
したと考えられる。これまでに飛鳥京跡の調査で確認されている溝
でも最大級の規模で、飛鳥京内の水を集めて飛鳥川に排水する基幹
排水路の一部であると考えられる。

木簡は、SD〇三一五の堆積土のうち、最下層の有機物が部分的
に集中する砂層から四二五点(うち削屑四〇六点)出土した。共伴す

る文字資料として墨書土器と刻書土器がある。墨書は「水」が三点、「水取」が一点ある。「水」は「水取」の省略と考えられる。刻書は「岡本」である。尾張地方に類例があり、生産地を示す可能性が指摘されている。また、木簡出土層と同一層からは、定木などの木製品、種子などの自然遺物が多量に出土している。特に定木については、飛鳥時代のものとしては初めての完形品で、当該期の文書形態を解明する上で重要な資料といえる。



飛鳥京跡第152次調査遺構図



SD0315出土定木 (数値は単位cm)

(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	
□ 乙 □	□ 斗	□ 生	佐 □	小 建	・ □ □ 之 之 □ □ □ □	・ 之 之 之 之 □	・ 野 野 □	丁 □ □	□ 国 原 □	大	日 □	者

160 160 160 160 160 160 091 160 160 160 160 160

(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)
・頓首謹白	志□□ _[侍カ]	一□	□人	得	大□

・『□□寺寺』

(110)×(13)×3 081

091 160 160 160 160

木簡はほとんどが削屑や細片である。(6)は「評」字の上に文字は記されていない。(12)(13)は直接には接続しないが同一木簡の断片である。表裏に墨書があるが、厚さ1mm足らずで、削屑の両面に小さな文字で習書したものとみられる。(14)の「小建」は天智三年(六六四)から天武一四年(六八五)まで施行された冠位の一つである。(24)は前白木簡の断片であろう。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 二〇〇四年(第二分冊)』(二〇〇五年)

(1~7・9十文字健、8鶴見泰寿)